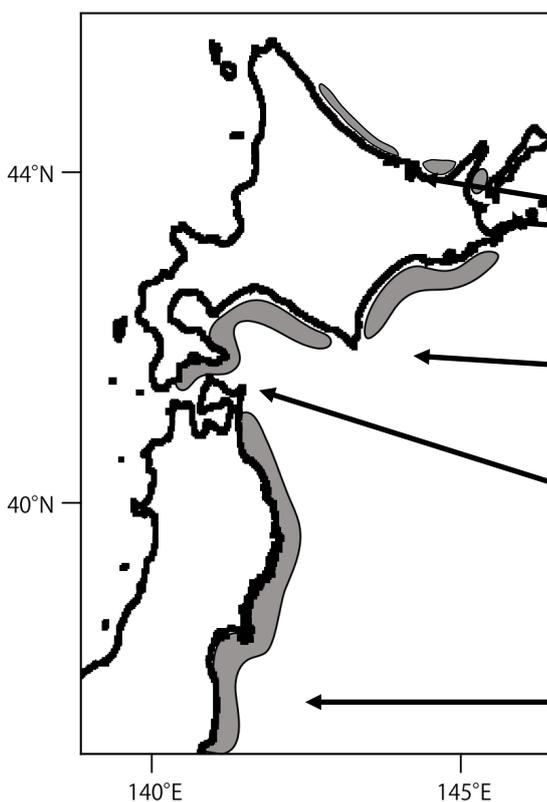




2024年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2024年10月~12月)のポイント



スルメイカの来遊量は、道東太平洋海域と津軽海峡~道南太平洋海域では前年を下回り、根室海峡~オホーツク海では前年並、常磐~三陸海域では前年を上回ると予測される。

根室海峡~オホーツク海：
来遊量は前年並。
魚体は見通しを示せない。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は見通しを示せない。

津軽海峡~道南太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より大きい。

常磐~三陸海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年より大きい。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：漁況：浮魚資源部（横浜）大島、松井

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2024年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2024年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網、刺し網

対象魚群：主に冬季発生系群（2024年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- （1）来遊量：前年を下回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間中の漁場形成は散発的となる。
- （3）魚体：見通しを示せない。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、底びき網、定置網、刺し網）

- （1）来遊量：前年並。
- （2）漁期・漁場：漁場形成は前年と同様に11月までとなる。
- （3）魚体：見通しを示せない。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- （1）来遊量：前年を下回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場が形成される。
- （3）魚体：前年より大きい。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場が形成される。
- （3）魚体：前年より大きい。

I 予報の説明

2024年7月～9月に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査¹⁾の結果(図1～3; 以降、いか釣り調査と総称する)、および8月(一部9月を含む)の漁況経過を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、道東太平洋海域と津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回り、根室海峡～オホーツク海域は前年並、常磐～三陸海域では前年を上回ると予測される。

1. 道東太平洋海域(いか釣り、底びき網)

この海域の漁獲対象魚群は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域(42°N以北、143°E以东)におけるいか釣り調査の平均CPUE(いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)は、漁獲が無かったため前年を下回った(図1、2)。道東主要港では前年同様8月に水揚げが無く、9月上旬も水揚げが無かった(表1)。したがって、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回り、漁場形成は散発的になると予測される。

魚体サイズについては、当該海域周辺における本年8月～9月上旬の漁獲がほとんど無いため、前年との比較予測はできない。

2. 根室海峡～オホーツク海域(いか釣り、底びき網、定置網、刺し網)

この海域の漁獲対象魚群は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。釧路以东(144°40'E以东)におけるいか釣り調査では前年同様に漁獲が無かった(図1、2)。釧路～羅臼周辺海域における9月上旬までの水揚量は前年同様ほぼ水揚げが無いまま推移している(表1)。北方四島周辺の太平洋側の海域における8月上旬以降の平均海表面水温²⁾は前年より低いが、10月までの予測水温(図4)³⁾は前年並のため、スルメイカは太平洋からオホーツク海へ前年同様に回遊すると考えられる。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年並と予測される。オホーツク海沿岸の10月の予測水温は前年並であるため(図4)、漁期は前年と同様の11月までと予測される。

魚体サイズについては、当該海域周辺における本年8月～9月上旬の漁獲がほとんど無いため前年との比較予測はできない。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域(いか釣り、定置網)

この海域の漁獲対象魚群は、津軽海峡～道南太平洋海域(41°N以北、143°E以西)に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域におけるいか釣り調査の平均CPUEは前年を下回った(図1、2)。大畑港における8月の小型いか釣り船CPUE(1日1隻当たり水揚量)は前年を上回ったが、9月上旬の小型いか釣り船CPUEは前年を下回った⁴⁾(表1)。函館港における8月と9月上旬の小型いか釣り船CPUEは前年を上回ったものの、水揚量としては前年同様低い水準であった⁴⁾。このため、津軽海峡～道南太平洋海域における群の分布量は前年並と考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されている。以上の結果から、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年を下回ると予測される。

魚体サイズについては、いか釣り調査の結果(図3)から前年より大型の個体が主体になると考えられる。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

この海域の漁獲対象魚群は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）におけるいか釣り調査では漁獲が無く、1尾しか漁獲されなかった前年同様に低い水準であった（図1、2）。青森県、岩手県、宮城県的主要港での8月の小型いか釣り船 CPUE は前年並か前年を大きく上回り、青森県、岩手県、宮城県、福島県的主要港における9月上旬の底びき網による水揚量^{5, 6, 7, 8)}は前年並か前年を大きく上回った（表1）。したがって、常磐～三陸海域における群の分布量は前年を上回ると考えられる。前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されてものの、8月、9月上旬の本海域の水揚量は前年を大きく上回っていることから、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年を上回ると予測される。

魚体サイズについては、宮城県における8月上旬の水揚物は前年より大きかった（図5）。当該海域において最も水揚量の多い青森県における8月、9月上旬の水揚物⁴⁾も前年より大きかったことから（図6）、魚体サイズは前年より大型の個体が主体になると考えられる。

- ¹⁾ 北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。
- ²⁾ 気象庁の札幌管区気象台が公表している日別海域平均海面水温
(<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaiyo/series/engan/engan.html>)
- ³⁾ 国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム (FRA-ROMSII) による予測水温 (<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)
- ⁴⁾ 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計。
- ⁵⁾ 八戸市水産事務所 (https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/suisanjimusho/1_1/1635.html) による水揚げ概況を基に集計。
- ⁶⁾ 岩手大漁ナビ (<https://www.suigi.pref.iwate.jp/>) による市況データを基に集計。
- ⁷⁾ みやぎ水産 NAVI (https://suisan-navi.pref.miyagi.jp/mizuage_top) による水揚げデータを基に集計。
- ⁸⁾ 相馬双葉漁業協同組合 (<https://www.soso-gyokyo.jp/market>) による市況情報を基に集計。

II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均 CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.02尾であり、前年（0.09尾）を下回った（図1、2）。海域別に見ると、道東周辺海域では漁獲が無かった（前年は0.09尾）。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では0.09尾であり、前年（0.24尾）を下回った。三陸周辺海域では漁獲が無かった（前年は0.03尾）。

津軽海峡～道南太平洋周辺海域における漁獲物の外套背長組成の最頻値は23cmにあり、前年（12 cm）より大きかった（図3）。道東周辺海域と三陸周辺海域は漁獲が無かったため、前年と比較できない。

III 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2023年は1.2万トンであった（図7）。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2023年は0.6万トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太

平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。

2023年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は3.4千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では1.9千トン、道東太平洋海域では1.0千トン、根室海峡～オホーツク海では0.2千トンであった（図8）。また、千葉県以南の海域での漁獲量は35トンであった。2019年～2023年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では74%、津軽海峡～道南太平洋海域では76%、道東太平洋海域では137%、根室海峡～オホーツク海では17%、千葉県以南の海域では105%であった。

2024年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は1.2千トンで、前年（0.8千トン）を上回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では1.1千トンで、前年（0.6千トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港の水揚量は一部集計中だが、現状では173トンで、前年並（190トン）であった。道東太平洋海域の主要港では前年同様漁獲がなかった。根室海峡～オホーツク海では0トンで、前年（1トン）を下回った。千葉県以南の主要港では9トンで、前年並（8トン）であった。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図7、図8を含めた漁獲量は全て推定値である。

²⁾ 水揚量は単純積み上げた数値。

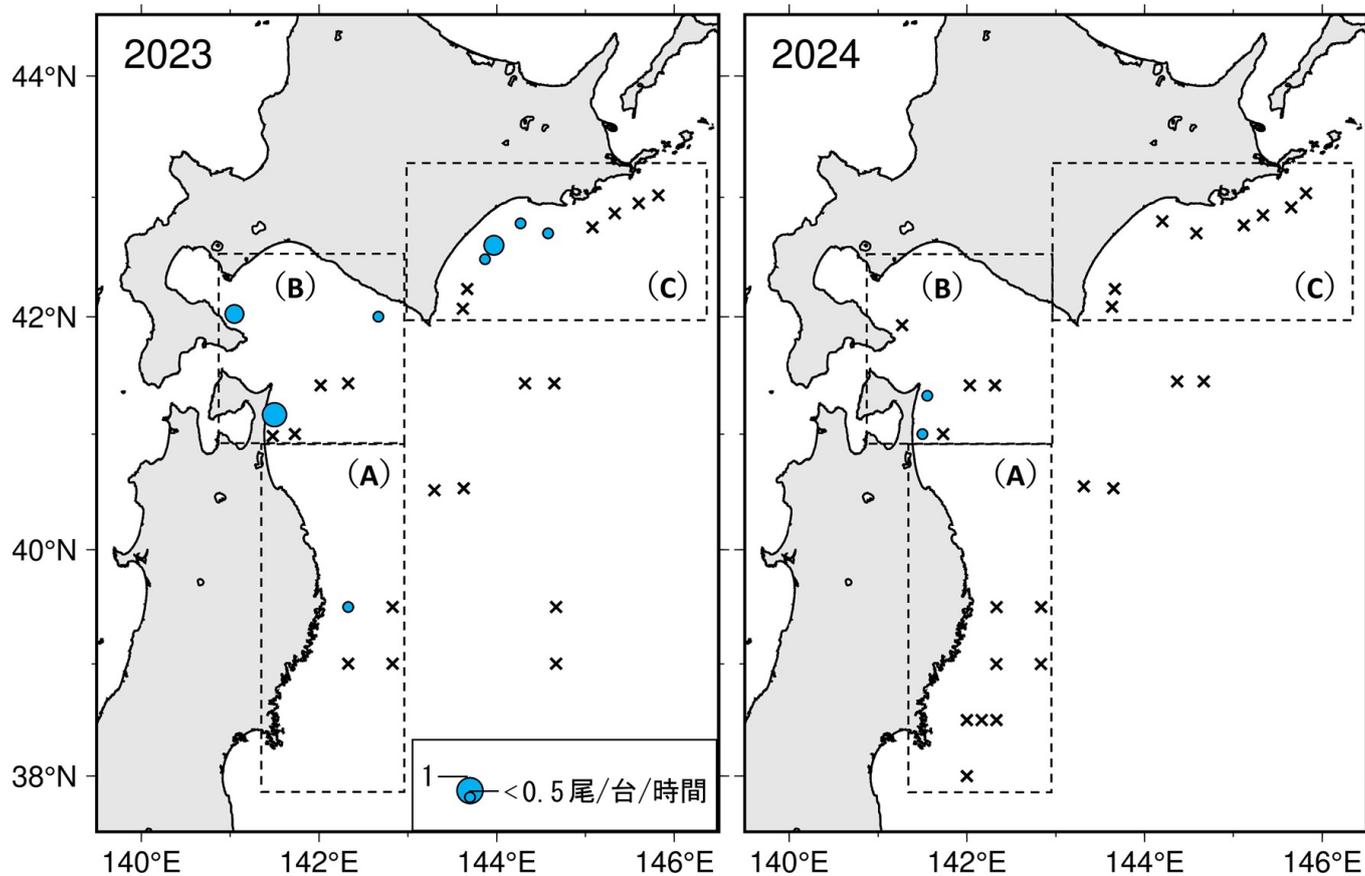


図1. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間あたり漁獲尾数）の分布

2023年と2024年の7月～9月のいか釣りによるスルメイカのCPUEの分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

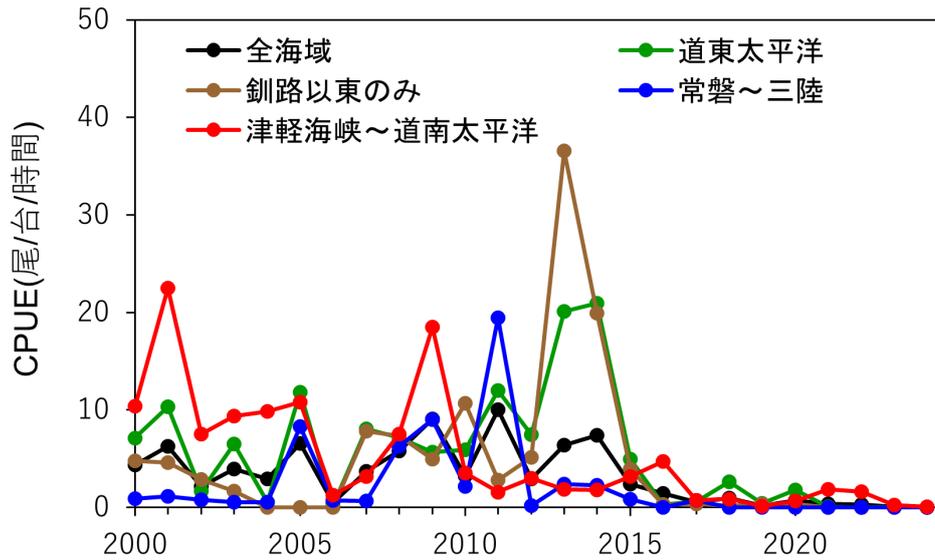


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

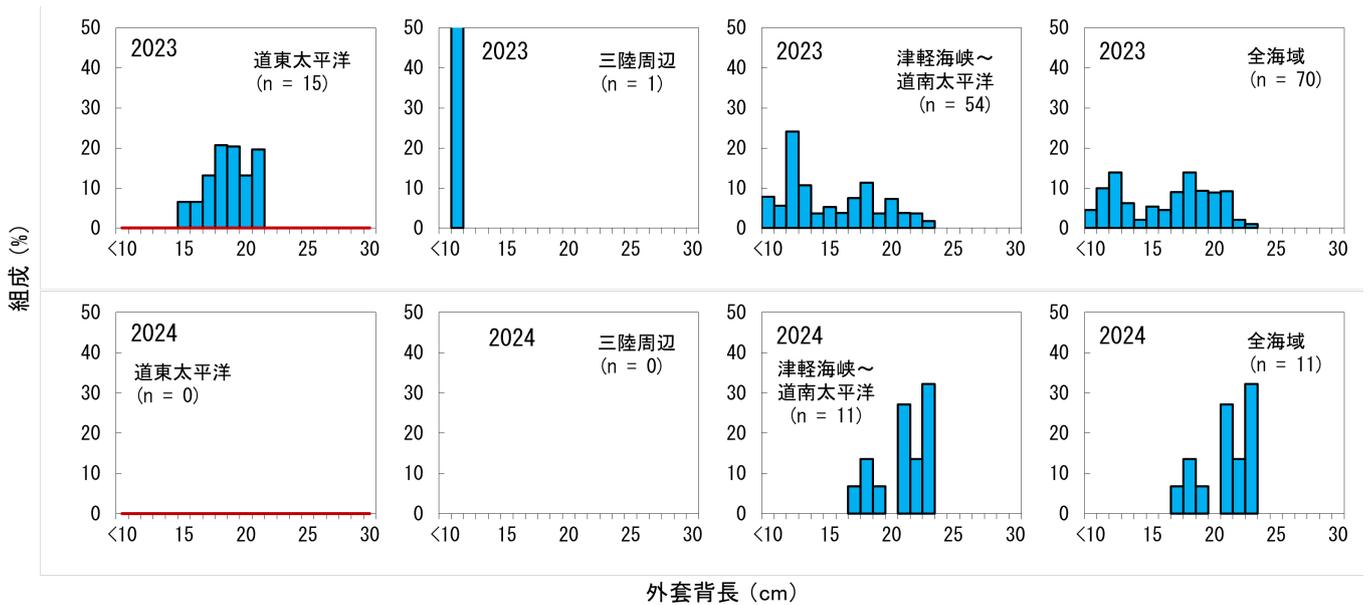


図3. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果
 各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している
 nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

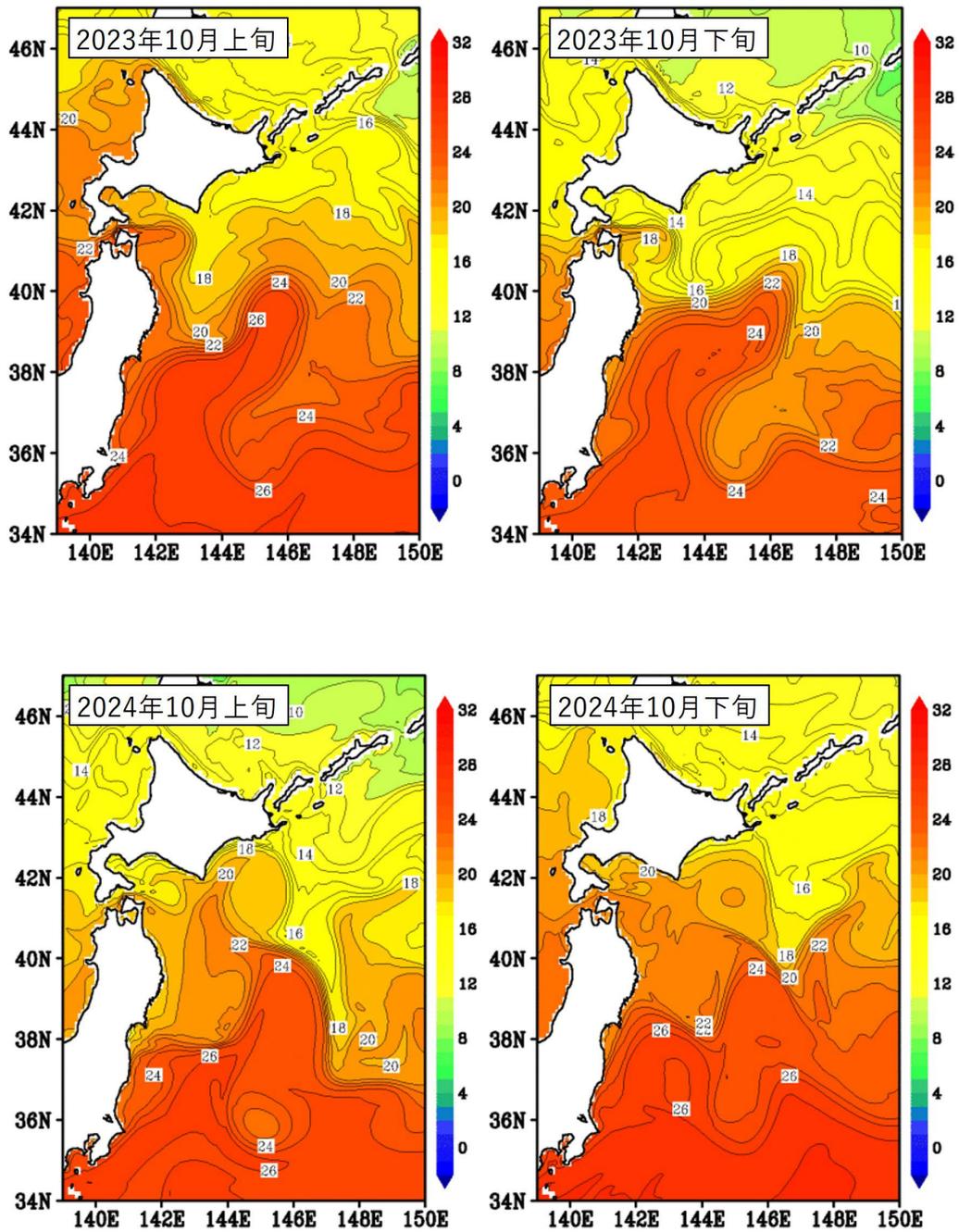


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2023年、2024年の10月上旬と下旬の海表面水温
 2024年は予測水温であり、2024年9月18日にHPより取得した

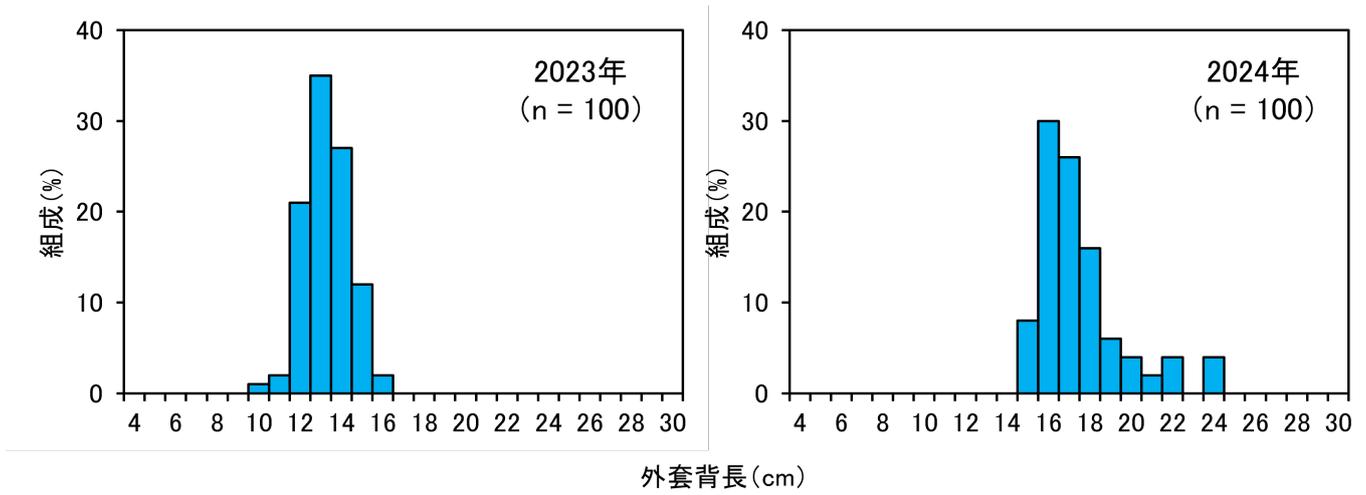


図5. 2023年、2024年の8月上旬に宮城県（底びき網）で水揚げされたスルメイカの外殻背長組成

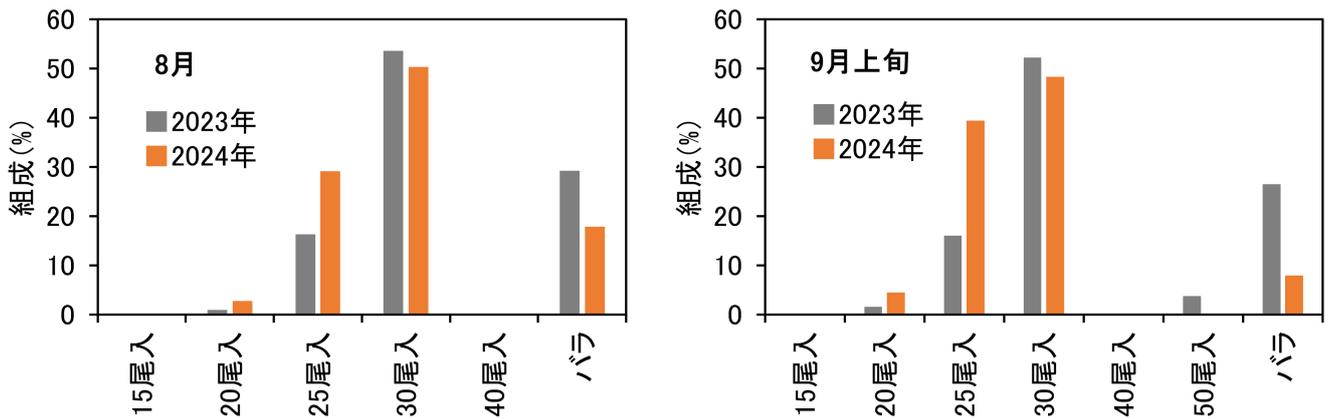


図6. 2023年、2024年の8月および9月上旬に青森県（釣り）で水揚げされたスルメイカの入尾数別水揚げ箱数の組成
 1箱当たりの重量は約6kgであり、入尾数が小さい（横軸の左側）ほど魚体サイズは大きい
 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計

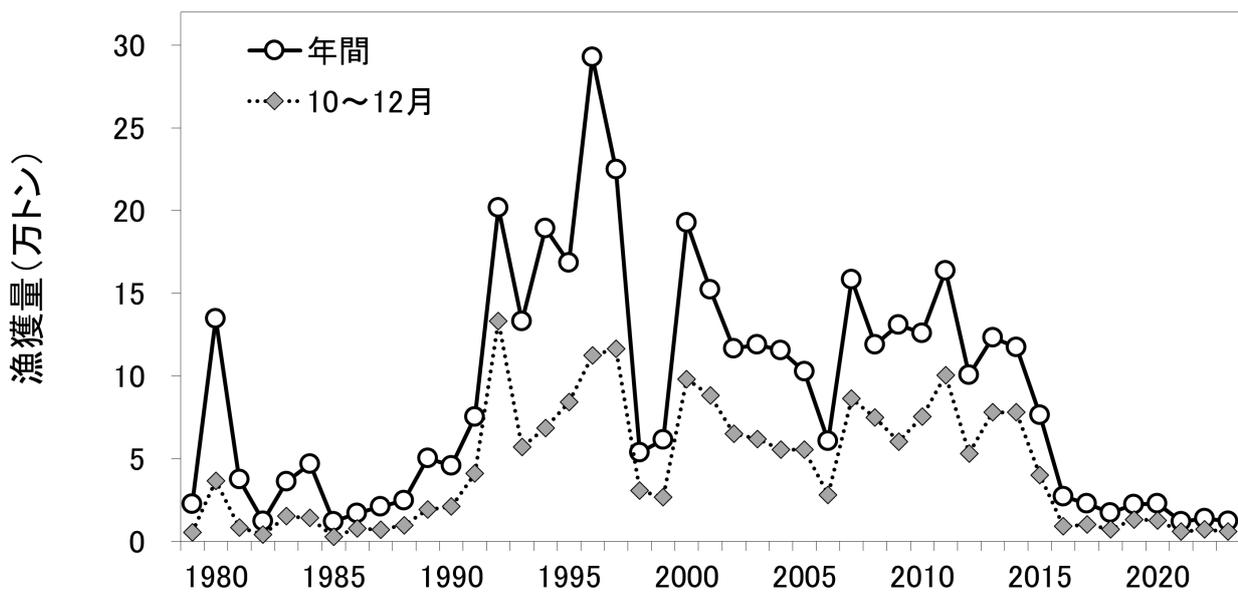


図7. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

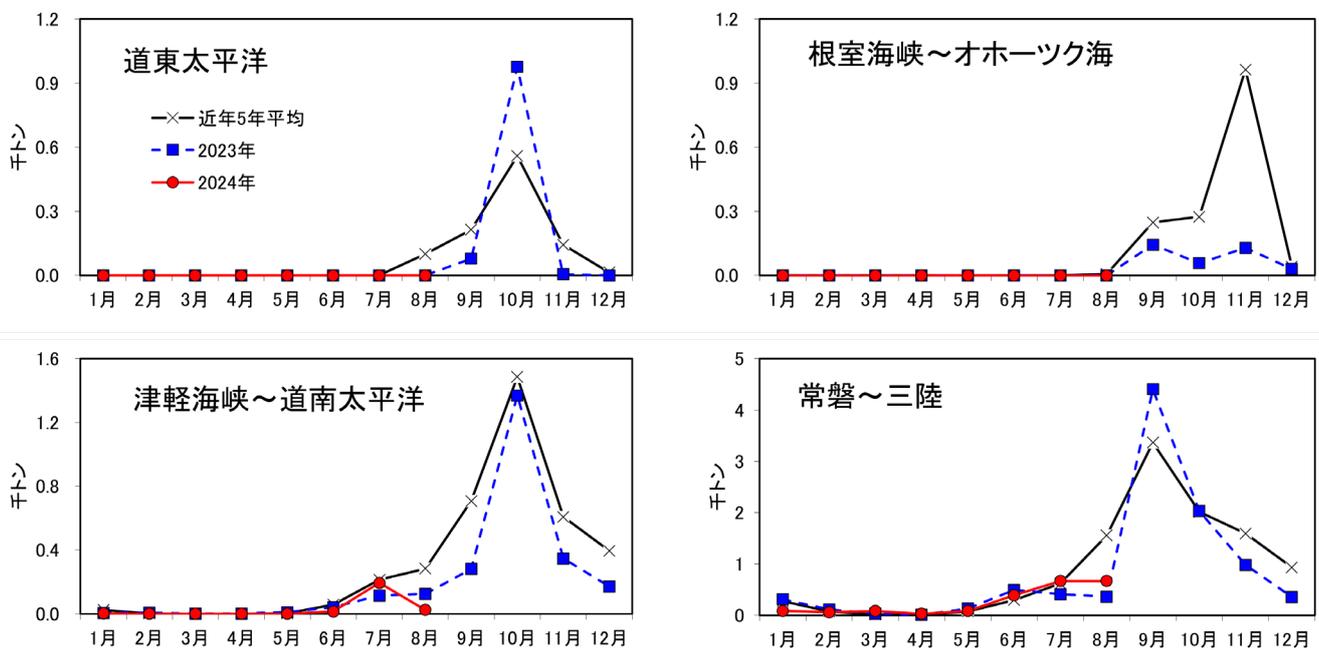


図8. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2019年～2023年の平均
 （いか釣り・底びき網・定置網・まき網・刺し網）

表1. 漁況経過（2024年7月～8月、一部9月・未集計・暫定・推定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	太平洋側での初水揚げは9月14日（釧路港、底びき網）で、前年（釧路港で9月7日、底びき網）より遅かった。 羅臼港では、6月に刺し網で20kgの水揚げがあったが、9月10日時点で釣りによる初水揚げはまだない（前年は9月13日に釣りで初水揚げ）。
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚量は12トンで前年比170%、CPUEは前年比144%であった。漁業情報サービスセンターのスルメイカ漁況・市況情報によると9月上旬の水揚量は1.6トン（前年は0.6トン）でCPUEは前年比154%であった。 南茅部での定置による7月の水揚量は122トンで前年比273%であった。
青森	大畑港での釣りによる8月の水揚量は7トンで前年比427%、CPUEは前年比163%であった。漁業情報サービスセンターのスルメイカ漁況・市況情報によると9月上旬の水揚量は0.8トン（前年は0.6トン）でCPUEは前年比45%であった。 白糠港での釣りによる8月の水揚量は24トンで前年比42%、CPUEは前年比92%であった。9月上旬の水揚量は15.9トン（前年は8.1トン）でCPUEは前年比199%であった。 八戸港での釣りによる8月の水揚量は107トンで前年比140%、CPUEは前年比161%であった。 八戸港でのまき網による8月の水揚量は26トンであった（前年は0トン）。 八戸市水産事務所の水揚げ概況によると、八戸港での9月上旬のまき網による水揚量は0トン（前年は0トン）、底びき網による水揚量は1138トン（前年は615トン）、いか釣りによる水揚量は101トン（前年は48トン）であった。
岩手	岩手県主要港での釣りによる8月の水揚量は188トンで前年比953%、CPUEは前年比514%であった。定置網による8月の水揚量は23トンで前年比134%であった。また、いわて大漁ナビの市況データによると、9月上旬の底びき網の水揚量は325トン（前年は346トン）、釣りによる水揚量は84トン（前年は85トン）であった。
宮城	宮城県主要港での釣りによる8月の水揚量は1.5トンで前年比244%、CPUEは前年比393%であった。定置網による8月の水揚量は6.3トンで前年比294%であった。底びき網による8月の水揚量は123トンで前年比437%であった。また、みやぎ水産NAVIの水揚データによると、9月上旬の石巻港への底びき網による水揚量は476トンであった（前年は222トン）。
福島	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。相馬双葉漁業協同組合の市況情報によると、相馬原釜港での9月上旬の底びき網の水揚量は51トン（前年は18トン）であった。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	主要港での釣りによる8月の水揚げはなかった。定置網による8月の水揚げは24kgで前年比5%であった。
神奈川	間口港における釣りによる8月の水揚げは11kgで前年比2%であった。
静岡	仁科港での釣りによる8月の水揚量は79kgで前年比55%、CPUEは前年比65%であった。
三重	奈屋浦港でのまき網による8月の水揚量は241kgであった（前年は5kg）。
和歌山	すさみ港での釣りによる8月の水揚量は2トンで前年比122%であった。
高知	主要2港への定置網による8月の水揚量は12kgであった（前年は0kg）。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	静岡県水産・海洋技術研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	三重県水産研究所
岩手県水産技術センター	和歌山県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産資源研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関)
千葉県水産総合研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
神奈川県水産技術センター	